

Title	資本の本質に関する一論争 (三、完)
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.6 (1922. 6) ,p.824(84)- 839(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0084">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220601-0084</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 資本の本質に關する

### 一論争 (三、完)

#### 金原賢之助

#### 九

「第四はクラークが資本は完全に可動的なり、絶體的に可動なれども資本財は然らずと云へる説に對する非難なり。一産業より百萬弗を回收して之を他のものに投入するは可能なり。有利なる條件の下に於ては冗費なくして之を爲すことを得べし。然れども具體的に一産業より其れの道具を取出して他のものに其れを入れると云ふは全く不可能なり。ニュウ・イングランドの捕鯨業に嘗て投せられたる資本は、今や或範圍に於ては紡績業に用ひらる。然れども其船舶は紡績工場として用ひられざるなり(Clark, Distri-

button of Wealth, p. 118)の説明よりして「クラーク教授は、資本財と區別せられたるものとしての資本は全く可動的なりと云ふ命題——眞の資本(true capital)の永續の場合に於ける其れの如くに、資本と資本財とは同一のものなりと云ふことの反對の證據となる所の命題を演釋せるなり」(Böhm-Bawerk, op. cit., p. 16)と爲せるボエム・バヴェルクに依れば、尙ほクラークは「斯くの如き變化は無限の程度に於て起り得るものなり」、「十億弗は百萬弗程容易に其位地を變更することを得」、「合衆國の全資本を異りたる産業に移すことを得、其を他の物質的實體に移せしむることを得、」と云ふことを現實に信ずる能はざるなり。茲に於てか、斯く信じ得ずとするならば、クラーク教授が眞の資本に歸したる完全なる絶體的可動性は如何にして維持せらるゝやと云ふ彼の反問を生ずるなり。

「事實に於てクラーク教授は屢々同一現象に關して二個の所説を述べたり。一は事實と全く符合する簡單なる言葉に於けるもの、他は總てのものを彼の想像力の其得意なる被造物即眞の永續的資本に歸する所の不自然なる言表しに於けるものなり。實際の損失なくして其使用を變更し得る生産用具(クラーク教授は彼等の一として土地を擧げたり)は比較的少きことは確實なり、多くの場合に於て斯る變更は著しき損失、能率の或る程度の減少、或は再度の變更の爲の或費用を以てのみ起り得なり。何等かの理由の爲に、生産の一方面に用ひられたる資本を減少して他方面に用ひられたる資本を増加するが有利ならば、其變更は具體的資本財を現實に移轉することによりて僅少の程度に於てのみ起り得るなり。通常其は、其分量の減少の望まるゝ資本財の磨消、及其代りて同一種類の用具に非る而

も他の異りたる種類のものゝ創造、と云ふことによりて生ずるなり。各産業には迅速に消耗し而して絶えず再生せられざる可らざる多種の資本財あるなり。其れ故一般は此種のものゝ移轉を迅速に且大なる損失なくして行ひ得るなり。徐々に消耗し行く持續的用具の存在することは斯る經過に長き遲滯を生ずべし」。(Distribution of Wealth, pp. 341-342, 278 参照)斯くの如き事實はボエム・バヴェルクも亦認むる所なるが、之を認むるが故に彼は——次の如く——問はざるを得ざるなり。「若しも眞の資本の完全且絶體的なる可動性に關する章句が空言にあらずして科學的眞理なりとせば、如何にして吾人は之等の事實を思考すべきや。完全なる可動性は眞の資本の普遍的特性なりと想像せられ、眞の資本が具體化するゝ資本財に關係なく其れに附屬するものなり。資本財の不完全なる可動性に對照し

て、此資本の可動性は絶體的完全なりと想像せらる。此は、眞の資本は絶體的容易且自由に他の形式及他の使用に委せらるゝを得と云ふこと以外の何ものかを意味することを得るや。

然れどもクラーク教授は此種の事實ありと主張せんとするや。彼が引證せし事實は何れも正に其反對を示さざるか、即資本の移轉と變形とは事實制限なく或は條件なくして起り得ざることを示さざるか。第二に此變更の範圍と速度とは資本財の具體的性質に依らざるや。若しも資本財が、容易に、異なる位他に於て使用するを許すものならば——例へば石炭或は銑鐵の如きもの——又資本財が迅速に消耗するが如きものならば、變更は迅速に容易に起るべし。而して若しも資本財が他の目的の爲に用ひらるゝを得ざる種類のものなるか或は彼等は置換が必然長期に亘る所のものならば、其の變更は徐々に起

るべし、又恐らく全く起らざるべし。資本移轉の全問題は資本財と關係して研究せられざる可らざるなり。』(Böhm-Bawerk, op. cit. pp. 16-18)

「クラーク教授は、彼自身の説明に於て、彼の言葉を嚴格に文字通りに採らざるやうに注意せしを以て、事實との明かなる矛盾より免れたり。彼は資本の完全なる可動性の一例として、生産の一部門より他部門に百萬弗移轉することを引用せり。合衆國の如き大なる經濟組織に於ては、右の價值或は更に一層大なる價值に至る具體的資本財も容易なる移轉容易なる置換の條件を満たすこと全く可能なるが故に、其例は實行不能の何ものをも暗示せざるなり。然れども上記の金額が尙ほ千倍萬倍大なるものならば、其例は假定せられたる變更の不可能を明かに示すべし。然るを以てクラーク教授も斯る例を選ばざるやうに注意したるなり。』(pp. 18-19)

十

第五、生産期間に關するクラークの意見は先づ之を二つの時期に劃して考察せざる可らざることは既に述べたる所なり。即彼の所謂 true capital の存する時期と是の存せざる時期との二なり。斯る資本の存せざる場合には労働と時間とは生産の絶體的要素なり。然るに之を有する社會に於ては事情全く之と異り、其は總ての待つと云ふことを廢するの手段にして、労働と其效果とを同時に發生せしむ。而して此は彼の所謂資本の職能たるなり。

其は果して科學的眞理なりや、ボエム・バヴェルクに従へば、明かに眞理ならざるなり。「クラーク教授は一定の資本財に歸せらるゝ生産物が何故に其財を作りし既往の労働に歸せらるべきにあらざるかの問題に觸れざるなり。』ボエム・バヴェルクは考ふ、洋服商が今日彼に渡す外套

は、今日牧場にて羊群を監視せる牧羊者今日絲を紡げる紡績工今日織物を爲せる織匠の共力によりて作られしや、其は過去の牧羊者其他の共力によりて成りしことは否定すべからざる事實なりと。茲に於て難すること次の如し。

(イ)はクラーク自身も實狀は正しく彼自身の説けるが如くならざるを以て一段の讓歩を爲せることなり。即曰く「クラーク教授も彼の命題が明かなる事實と一致せざることを看過するを得ざるなり。彼は「文字通り」に眞なること、「事實上」眞なることとの間に區別するの手段を採り、今日の完成品は文字通りにはあらざるも事實上今日の労働の産物として觀察さるべきなりと論せり。「クラーク教授は文字通りに眞理を固執することに依りても、其れより離るゝことによりて一層正確に眞理に達し得べしと信ずるは極めて奇妙の事と言はざる可らず。』「然れども亦

如何に僅少なりとも事實より離れるとは、決して、全く重要ならざる云ふ譯には行かざるなり。原料品Aの生産階段に於ける労働者中に同盟罷業ありと想像せよ。若し完成財Aの産額はA'Aの階段に於ける同時期の労働に基くと云ふことが文字通りに或は事實上にても科學的の眞理なりとせばAに於ける労働の停止は直ちにAに於ける産額に影響を及ぼすならん。されど實際に於ては明かに斯る何事も知らざるべし。其停止は後の時期に於てのみ生産の全期間に懸れる完成財の産額に影響するなるべし。(Böhm-Bawerk, Capital and Interest once more; A Relation to the Productivity Theory, The Quar. Jour. of Eco., vol. XXI, pp. 267-270)

「靜的狀態は想像的なることは眞なり。總ての具體的社會は動的なり。而も此は靜的理論の結論を無効ならしむるものにあらず。何となれば靜的法則と雖眞の法則なればなり。吾人は動的社會に於て起る所のもの、一部を了解せんが爲に彼等を分離して研究するなり。靜的假設は單に他の力が假りに無視せらると云ふ點に於て現實と異なるなり。靜的の力が動的の世界に於て作用し續ける以上靜的法則は有效なるなり、このクラークの説に對してはボエム・バヴェルクも満足を以て同意する所なり。然るに猶彼の説に依れば、其は如何なる二重の眞理をも許容するものにあらず、靜的眞理は動的狀態の下にても不眞なる能はず、動的眞理は靜的狀態の下に於ても眞ならざること能はざるもの」なるに拘らず、クラークは動的狀態にては資本財を靜的狀態にては眞の資本を用ふるは極めて不都合なる所以

なり。唯に然るのみならずクラーク自身の方法は眞理の一面のみを表はすものなりとて之に對して非難を加へたり。「彼(クラーク)の靜的理論の説明を通じて、彼は靜的法則を發見し吟味し而して證明するの手段として動的實驗を用ふるなり。彼の思想の全組織は、最後效用と最後生産力との原理並に絶對的生产力と最後或は特別生産力との間の相違に基くものなり。例へば彼は、労働の最後單位の生産物のみ労働者に歸せらると云ふ彼の題目を如何に證明せんとするや彼は言ふ、或特定の人の絶對的生产力なるものは、其人の爲しつゝある其特定の仕事の重要如何によりて測定せらるゝなり。或人の有效生産力なるものは、其人が去りし場合及雇主が彼の力を一層緊切なる仕事の爲さるゝが如くに排置し換へたる場合に、雇主の蒙る損失によりて測定せらる。雇主はBをAの地位にCをBの地位

に置くことあるべし。而して完成されざるまゝに放擲せらるゝ其唯一の仕事は必要の程度の最も低き種類のものなりと。靜的狀態に於てすらも、歸せられたる生産物及報酬は有效生産力によりて決定せられ、而して斯る轉嫁の標準は絶體的生産力に於ては發見せられざることを、斯る想像的動的實驗が公正に立證するものと彼は信するなり。彼は靜的眞理の確證の手段として動的變化を適用し又適用せざる可らざることを十分意識せるなり。其れにも拘らずクラークは彼の *Table* の表はるゝや直に總て之を見ざるが如き態度を採ることが、ボエム・バヴェルクの最も論難せんと欲する所なり。(pp. 271-272)

(ハ)は各段階の労働が結果を齎らす時期に関する混亂と共に、労働に歸せらるべき生産物の量に關してクラークが眞理を逸脱せることに對する非難なり彼はクラークの假定せる例即生産

上の四階段を表はせるA'A'A'を探り、問題の複雑を避くる爲に斯る生産が總て無地代の土地に於て又考量中に入るゝを要せざる程殆んど固定資本を用ふることなくして行はるとの前提をなして、「完成財A'」一〇〇個の生産の爲に必要な労働の分量が各階段に於て停止せりと想像せよ。而して轉嫁の理論を適用せよ。各階段の労働を停止することによりて、生産高には如何なる減少を生ずるや。明かに其停止はA'の一〇〇個全部の消滅を惹起すべし、A'の五〇或は八〇にあらずして一〇〇全部の消滅なり。一〇〇個全部が存在すると否とは、労働の連続の全部が存在すると否とに基くなり。其れ故A'の生産物の總ては、クラーク教授の原理に従へば、此連続に歸せらるべきなり。従つてA'の生産物の總ては此連続の労働者に歸せざる可らず、而して彼等のみに歸せざる可らざるなり。然るに彼は

斯る事を爲さず宛も其が自然の事なるが如くに彼は之等の労働者に歸せらるべき分前より或るものを削除するなり。従つて彼等の報酬は全生産高を盡くさずして或るものは残るなり。茲に於て之を其純生産物として彼の true capital に歸着せしむるなり。

然るにクラーク教授は、此減少が如何にして起るか云ふことを、何れの労働の連続に關しても吟味せざるなり。即眞の連續換言すれば時間上相繼續せる労働者の連續に關して斯る吟味を爲さず、何となれば彼は之が本來の連續なることを認るを誤りたればなり。又彼の誤れる連續即同時期の労働者の其れに關しても斯る吟味を爲さず、何となれば此所に於ては斯る研究は恐らく爲さるゝを得ざればなり。(pp. 273-274)

即ポエム・バヴェルクに従へば、クラークは第一に、労働に本來の生産物を對照せしめずして

他のものを對照す。第二に、労働に本來生産せられたる分量を對立せしめずして而も他の分量を對立せしむるなり。而して其魔術的説明によりて、彼は説明すべきものを暗黙の中に假定せるなりと。

以上を以て吾人は、ポエム・バヴェルクの駁論の大體を観察したへたるが、此他彼は左の二點よりも論駁を加へて以て、クラークの true capital なるものは要するに想像的のものに過ぎざることを論結せり。即第一は、労働と資本との共力より生せる生産物全部が労働に歸せらるべきにあらず、或は資銀として労働者の手に入るものにあらず、と云ふことを立證せんが爲に、轉嫁の原理 (principle of imputation) が消極的に用ひられたることなり。クラークは明かに言ふ、産業の全生産物が労働者の手中に落つるものにあらず、何となれば産業は労働と資本との共力

を意味するものなればなり。土地道具建築材料を供する人々は労働と資本との全共同生産物の一部を受くるなり。此全體の中の労働其ものに歸せらるゝ部分を吾人は労働の全生産物として解すべきなり。此部分が賃銀として労働者に渡るべしと云ふとは可能なるのみならず、完全なる自由競争の下に於ては、確實なりと。第二は資本は其最後生産力 (final productivity) の結果なる純所得を獲るものなりと云ふことを示す爲に、其が (principle of imputation) が積極的に用ひられしことなり。クラークは利子の普遍率説を主張し、利子も亦地代を定むる原則と等しく最終生産力によりて定めらるゝことを論せり。資本單位 (units of capital) の連續の如何なるものも、其所有者に對して其最後のものゝ生産する以上に獲得するを得ず。最初の單位の所有者が使用に對して之以上を要求するならば、企業家は此部

分の資本を抛棄して其代りに最後の二單位のものを置き換ふ可し。彼が生産上失ふ所のものは、資本の最後の單位の直接の生産物によりて測定せらる。其は各單位の有效生産物を示すものなり、と説き而して利子問題は『眞の資本』に關係すべのきもにして資本財の關係すべき所にあらすど主張せり。

之等の點に對してもボエム・バツェルクは興味ある詳細なる批評と反駁を加へたれども、今之を論述するの餘裕なきを以て他日に譲り、直ちに右の非難に對するクラークの辯駁に移らんと欲す。

## 十一

「余は、最初に於て、余の著書に述べられたる資本の觀念が理論的思索より論争さるゝに足らば、其は亦實際的思索よりも論争さるべきなりと云ふことを主張せざる可らず。何となれ

ば此部分の學說の目的とする總ては、實業家の精神を占めたる資本の觀念を明瞭なる言葉に表はさんとするにあればなり」と述べて以てクラークは、彼の資本學說の目的が那邊に在るやを明かならしめ、而して彼の主張する所は資本と云ふ名が正しく適用せらるゝ、或客觀的のものが存在すること、並に資本財と云ふ名が適當に適用さるゝ、或るものも亦存在すと云ふことなりとて、此所に於ても亦彼の主張が此兩者の區別を明かならしめんとするに存することを表明せり。「之等の二個の實在は一見同一なるが如く思はるれども、再見すれば重要な點に於て相違すること發見せらる。又彼等の何れも、極めて重大なる混亂を生ずることなくして、一方は自由に他方に對して代用さるゝを得ず」と。(Clark, *Concerning the Nature of Capital, The Quar. Jour. of Eco., vol. XXI, pp. 352-353*)

然らば如何なる點に於て其兩者は相違するものなりや。クラークは先づ資本の意義を説明して、吾人の意味する資本とは一定種類に屬する事物の集團なりと、而して其れ等の事物とは機械道具及建物によりて代表せらるゝ種類のものなり。「若しも人が、時の一瞬間に於て、其所有に在る此種の物の總ての目錄を作り得るならば、其等のものは其瞬間には、其資本を構成せることを發見せらるべし。而して數學的の一瞬間には資本は其目錄に載せらるゝ所の機械道具建物より成立し、資本と資本財との間に相違なし。されど他の瞬間に於ては彼等の或るものは去り他のものが其場所に表はる。一年の後には多數のものが去り、五年の後には彼等の大多數は消滅すべし。其間、吾人は最初の財ならざるも此種類の財を所有するに至るべし。此變更する組織を有する永續的集團は或る種の名稱の附與

せられざる可らざるものにして、之に對して通常の思想に於て資本と云ふ言葉が適用せらるゝなり。其は各瞬間に於て一定種類に屬する或個々のものより成立せる一本體にして、此本體の存せざる瞬間はなきなり。然れども本體は生物の其れの如くに組織の消費と補充とによりて保持せらるゝなり。吾人が資本と云ふ言葉に何等かの繼續的觀念の附屬するものとして用ふる場合に於て、其言葉の適用を餘儀なくせらるゝ所のものは此永續的本體に對しての事なり。」(Clark, *op. cit., pp. 353-355*)彼の所謂 true capital なるものゝ内容は依然變る所なきを強調し、且此ものゝ本體を明かならしむるが爲に川、動物の身體、及原生林の例を引用して其組織は變更すれども其本體は永續する旨を説明し、「言葉の用法に關して起り得る問題は如何なるものなりと、斯る本體の客觀的存在及存續に關しては確

かに疑問は存せざるなり」と言へり。

次いで斯る思想を反駁するを得ざる所以を明かならしめて曰く「余の門前を流るゝハドソン河は和蘭探險者が一六〇九年に発見したると同一の川なるが如くに、資本も亦、其或部分は父祖より子孫に長期間傳へられて、等しき繼續を有するものと觀察せらる。此思索方法が反駁せられ得るならば、ハドソン河に關しては、ニュウヨーク州の地形の永續的特色としてにはあらずして Hendric Hudson が最初ニュウヨーク灣の口に発見せし瞬間に存在し其れ以來は決して存在することなかりしものとして、語る必要なるべし。一六〇九年のハドソン河、一六一〇年の其れ、一六一一年の其れ、と云ふことが必要なるべし。又探險者自身も其河の発見當時に於ては一六〇九年の Hendric Hudson なれども、其翌年は全く別人となるなり。要するに、

と云ふ斷定を類推せんせしに對して、クラークは、反對の意を表明して曰く、「若も之等の言葉が、余の批評家が他の個所に於て叙述を解釋するに採りしが如く寛大に解釋さるゝならば、此逆説に於ても、事實と撞着するが如き如何なる意味も発見せられざるべし。若し吾人が現在存せる資本財の蓄積を觀察し而して土地は其一として包含せしめざるならば、其如何なるものも一時的存在以上を有せず、又彼等に具體化されたる價值は永續的存在を有することを——而も永續的存在を有するは其が具體化されざる状態に存するが爲には非ることを、——吾人は認むるに至るべし。其(資本財)が現在の物質的具體的狀態を脱せし場合には、其は他の状態を探るべし。而して其は、抽象に過ぎざる無形の價值としてにはあらずして、抽象以上の或ものなる具體化されたる價值(embodied value)として永

消失する組織の補充によりて維持せらるゝ本體を觀察するの一般的方法が全然拋棄せられざる可らざるに至るなり。されど現今に於て此思索方法は人の熟知する所なるは疑なきなり。現時のハドソン河は其始より存するものにして、現在のデニウプ河も亦然り。五十年前に造られたる資本は、最初其を構成するに助力せし個々の貨物は今は存在せずと雖、同一の存續を保てるものなり、(pp. 355-356)云々と述べて以て、之を排さんとするポエム・バツェルクの問に答へつゝ、true capital の存在する所以を力説せり。

更にポエム・バツェルクが「一組の物體が消失して他のものが其れに代りて現はれし時、吾人は資本は繼續すと言ふ。而も文字通りに繼續的存在を有するものは唯抽象に過ぎざるなり」と云ふクラークの意見を引用し、而して之よりして「資本は、單なる抽象として、決して存在せず」

久に存續すべし。斯る事情は吾人に一事實を知らしむべし。即ち資本を表示する抽象的方法は通常の用語に於て最も慣熟せるものなることなり。實業家は彼等の工場道具及原料品等が常に其手許に存するを知る。而も彼等は、資本を、價值として、元本として、富の總量として、表はす、何となれば此單なる數量的表示は事實上の物質的事物——其組織に於ける變化にも拘らず永續するもの——の觀念を、十分に彼等の念頭に與ふるものなればなり。(Clark, op. cit., 363-370)斯くしてクラークは彼の見解は事實上よりも其正當なる所以を立證し得ることを主張し、永續的存在を有する所のもののは單なる抽象に過ぎず、true capital なるものは單に想像力より抽出せられる假設物なりと云ふは、全く正鵠を失せるの非難にして誤解に基くものなりと論結せり。

然るにクラークが右に述べたる意見は、始め彼が資本と資本財との間に嚴格なる區別の要する旨を主張せしにも拘らず、茲に於ては資本と資本財とは同一のものなり論じて之を認めたるが如く解せられて、再びボエム・バヴェルクの論難を蒙るに至れり。即ボエム・バヴェルクは「彼の true capital は幻影に過ぎずと云ふ余の反駁に對して、クラーク教授は其實在性其具體的性質を確證して彼自身が以前に用ひしよりも一層明確なる言を爲せり。彼は、此度は、資本は資本財の集團なりと稱し、單に其が斯る財より成立すと言はず。又彼は嚴格なる意味の瞬間に於ては資本と資本財との間には相違なしと稱せり。之等の最後の言によりて、クラーク教授は雙子或は水の二滴に在るが如き相似性が存するのみならず文字通りの同一性 (literal identity) の存することを意味するものと、余は斷定するを

得るなり」と論じ、之に對して資本と資本財とは同一のものなりと云ふことは彼も亦大いに讚意を表する所なれども其れに讚意を表するが故に次の瞬間には左の數點に於て疑問を抱かざるを得ずと爲せり。

(一) 嚴格なり意味の瞬間に於ては資本と其を構成する資本財とは同一のものなりとはクラークの言ふ所なるが、然らば資本は如何なる瞬間に於ても資本財と同一にはあらざるかとはボエム・バヴェルクの問ふ所なり。クラークの説くが如くに、時の経過なるものは、資本と資本財とが二個の異なる物質的實在として現はるゝ瞬間を、齎らすことを得るものなりや。若し此が事實に非んば、二つのものゝ存在を認むる學説は如何になるべきか、ボエム・バヴェルクは斯く疑へり。クラーク教授は今日の資本は昨日の資本財と同一にあらざると云ふ事實に面し居ることは

確かなり。而して彼は次の同一性を否定し得んが爲に策略を必要と考ふるが如く思はる。——其同一性とは、昨日或は去年は道具又は原料なりしが今日は消耗せらるゝか又は消費財に變形せらるゝ財と、資本との其れなり。然れども現在全く資本財に非る物と資本との同一性を否定せんが爲に、資本財と資本との同一性を否定すると云ふことは確かに望しからざるものなり、又論理的にも殆んど其必要なものなり。Bism-Bawerk, The Nature of Capital: A Rejoinder, The Quar. Jour., vol. XXII, pp. 28-30)

(二) ボエム・バヴェルクに従へば、物質的事物は或状態の間人類の幸福との一時的關係に入り、其關係に於て生産財(即資本財)として間接に人類の欲求を満すなり。彼等は無限に此關係に在るにあらずして漸次之を通過するなり。而して他のものが代りて此關係に入り來るなり。

資本の觀念は此一時的關係に存する財を常に意味するものにして、資本は之等の財の總て以外のものにあらず又決してあり得ざるなり。從つて資本は具體的事物を他にしてはあり得べからざるなり。然るに「クラーク教授は事實に於ては全く障害ならざる論理的障害を自ら設け、之によりて此單純なる事實を同様に單純なる方法に於て捕捉するを妨げらるゝなり。斯くして自ら造れる困難を免れんが爲に、事實に矛盾する淺薄なる工夫を爲し始めたなり。彼は、實際存在せざる新種類の物を、實在の世界に充てんとするなり、即眞の『文字通の』存在を有し又『物質的の或もの』なれども資本財とは異なる或ものなる資本を充つるなり。」(p. 30)

(三) 斯くの如くんば、クラークは如何にして彼の true capital を、『具體化されたる價值』として、『變移する具體物に於ける永續的價值』と

して、定義するを得るや。若し資本にしてクラークの言ふが如くに資本財の集團なりとせば、如何にして資本は其れに具體化され得るや。眞面目に物が其れ自體の中に具體化され得るや。是ボエム・バヴェルクが第三に問はんと欲する點なり。(p. 30)

(四)は既述の非難に於けるが如く、クラークの眞の資本の永續に関する議論なり。多少重複の嫌あれども之を再述せんに、ボエム・バヴェルクにとりては「クラーク教授は眞の資本の永續に關する法式によりて呪はれ居るが如くに」思はるゝなり。彼の解する所に從へば、クラークは之によりて吾人をして資本財とは異なる或ものゝ存在を認めしむるものと信ずるが如くなれども、事實斯る明確なる何ものかを認むることを得るや。嚴に考ふるも寬に想ふも、此法式は用ふるに能はざるものにあらずやと。五十年

存續せし資本の例を思考せよ。五十年前に農場の形に於て創造せられたる資本が、絹絲の蓄積の形に於て所有せらるゝ今日迄存續せし場合に、クラーク教授は、五十年前に資本なりし物質的事物と今日資本なる物質的事物とは同一のものなりと、十分なる學問的正確を以て斷定し得るや。事務家は恐らく答ふ可し。或意味に於ては同じ資本なり。然れども他の意味に於ては同一ならず、農場は農業資本なりしに、絹絲は商業資本なりと。

而してボエム・バヴェルクは之が相違を證明する爲に更に一例を家屋に求めて曰く、家屋はクラークの眞の資本の如くに、其構成部分が變化するにも拘らず繼續的存在を有する實在なり。其は修繕せられ、新しき窓が取附けられ、新しき軒が増され、或は擴張もせらるべく、再築もせらるべし。此場合に其は何時迄同一家屋

なりと認め得べきか。之に對して總ての方面より異議なき回答が得らるべきや。一種の回答は其家屋に對する抵當權を考慮するの機會を持つる辨護士より來るべし。又一は其が詩人の死せる家なりや否やを決定せざる可らざる歴史家より來るべし。言語學者、物理學者、論理學者は各々其見地より異なる回答を爲すべし。斯くして吾人は同一性の問題に關して半打の異なる返答を得べし。されど吾人は六個の異なる物質的事物に關係するにあらずして、各々其特殊的目的の爲に是認せられたる六ヶの抽象の結果に關係することは明かなり。以上の如くして家屋及資本の『繼續』に關する法式は、文字通りに且明瞭に同一事實なりと云ふ堅固なる基礎に基くに非らずして、動搖する主觀的見地に基くものなり。(pp. 31-33)

斯くして、彼等はクラークの true capital を挾みて、一進一退、鎬を削りて論戰に力め、斯くの如き大論争を惹起するに至りしが、其一者が所論を發表するや他者は之に對して根本觀念は勿論其枝葉の點に至るまで批評と反駁とを加へて盡くる所を知らず、吾人は眞に其果てしなきを覺ゆるなり。其は兎もあれ、吾人が資本に關して意見を定むるに當りては果して何れに組すべきか。ボエム・バヴェルクに讚してクラークを排すべきか。後者に屬して前者を棄つべきか。將又其何れをも採らずして可なるや。是極めて難澁なる問題なるべし。先づ吾人は、次に筆を更めて、彼等の學說に對する諸學者の批判を求め、見解を検して一般思想の傾く方向を質さんと欲するなり。(一一、五、一九、稿)